



干拓以前のの中津街道 海岸線の風景

〔左 図〕『大日本名所図録』明治31年(1898)より。
中央の島は鬼塚。現在は干拓地に取り込まれる。

〔右写真〕干拓以前の鬼塚の遠景。

『舞姫』等の著作で知られる森鷗外は明治32年(1899)から3年間、陸軍軍医として小倉に滞在し、『小倉日記』を著した。

同日記によると、鷗外は明治33年(1900)6月1日～7日、当時の九州鉄道と豊州鉄道を利用し、大分方面を旅行した。当時、椎田駅以南は車窓から海側を眺めると、上図のように砂浜に広がる旧中津街道の松林や豊前海に浮かぶ鬼塚(上写真)など風光明媚な景色が広がっていた。日記には直接記載はされていないが、名勝三保松原(静岡県)を思わせる景勝地に、文豪「森鷗外」も旅情を深めたであろう。(地図の⑧)

岩田屋の繁栄

中津街道に面した椎田宿のほぼ中央に、かつて米商・酒造・両替商・質屋経営で栄えた豪商「岩田屋」があった。

天保14年(1843)、小倉藩は差し迫った財政状況を打開するため、藩札に代わる紙幣発行を有力商人に許可し、岩田屋札等が発行された。

西福寺本堂外陣の彩色大天井や金富神社、鎗宅神社の石



古写真に見る椎田の豪商

現在の中町駐車場付近。
かつてこの付近に岩田屋と並ぶ豪商「尾崎屋」があった。
(門構えの建物)



岩田屋札
(五百文札)
北九州市立いのちのたび博物館所蔵

燈籠、手洗盤、綱敷天満宮の大石燈籠は岩田屋が寄進したといわれ、かつての繁栄ぶりが伺える。

芭蕉句碑と日田屋

日田屋は椎田宿の南端にあり、岩田屋と同様に物産商として栄えた。文久4年(元治元年1864)、朝廷から宇佐神宮に派遣された宇佐奉幣使が椎田宿で宿泊した際の記録に日田屋重三郎の記述が見える。



日田屋の当主「井上重三郎」は東井蘆鼎雨の俳号を持つ俳人で、現在金富神社に建つ句碑(上写真)は重三郎が自宅庭に建立したもので、後世移築された。また、金富神社鳥居前の狛犬(左写真)には大正7年日田屋 井上富藏の名が刻まれる。日田屋の長期に渡る繁栄を物語る。(地図の⑦)



編集・発行：築上町教育委員会／2018.10.1改訂
船迫窯跡公園／TEL0930-52-3771 (FAX兼用)
築上町歴史散歩 <http://chikujō-rekishi.jp/>

中津往来 中津口往還 小倉往来

中津街道 椎田宿



福岡県築上町

「細川・小笠原時代の道」中津街道

江戸時代になると、江戸日本橋を起点に五街道（東海道・中山道・日光街道・奥州街道・甲州街道）が整備され、九州にも長崎街道をはじめとする八街道と脇往還が整備された。

そのうち、小倉城下から中津城下まで全長52kmにおよぶ中津街道は江戸時代初期に細川氏・小笠原氏によって整備され、明治9年（1876）から昭和8年（1933）までは国道の一部として、昭和13年に現国道10号線が開通するまで豊前地方の主要道として使用されてきた。

なお、江戸時代には「中津往来」「中津口往還」「小倉往来」など行先を冠して呼ばれ、中津街道という呼称は近年一般的となった通称である。



九州の街道の起点 常盤橋(小倉北区)

「中津街道を行く」



町内に残る中津街道沿線の道標
左から「湊(貝曲)の里程標」「二口の道標」
「西高塚の道標」「西福寺前の里程標」

町内の中津街道沿いには石製の道標や里程標が一部移築されるも、今も残されている。湊（貝曲）の里程標は明治25年、それ以外は江戸時代に建てられた。

中津街道は西高塚道標で城井谷を上り旧寒田小学校付近から求菩提山に続く「求菩提道」に分岐し、さらに二口道標で秋月往来・香春道に分岐する。

西福寺前の道標（もとは天神交差点）には「山鹿（みやこ町）まで三里三十一丁（14.8km）、苅田まで四里半（17.6km）、松江（豊前市）まで一里八丁（4.7km）」とある。（地図の③・④・⑤）

「『筑紫紀行』に見る中津街道」

尾張（名古屋）の呉服問屋の隠居「菱屋平七」が享和2年（1802）に4ヶ月かけて北部九州を旅した日記『筑紫紀行』には中津街道を小倉から中津方面に向かう様子がよく描かれ、当時の椎田宿や湊の街並みが目に浮かぶようである。

冒頭では二口の道標横を通り、椎田宿に差し掛かった所を描く。当時、城井川には橋は



二口道標③と奥が城井川



なく、川の浅瀬を歩いて渡った。二口道標下流の二口橋周辺は今でも浅瀬である。

椎田宿は商店や宿屋等150軒程が軒を連ね、築城郡の中心で、当時の築城郡の役所である椎田郡屋や御茶屋（公儀宿泊施設）が整備された。

椎田宿と湊は真如寺川で隔てられ、時代は下るが明治12年の『湊村戸別図』（裏面参照）には太鼓橋が描かれ、当時も橋があったと考えられる。

湊はかつて造酒屋、醤油屋、廻船問屋等が栄えた。平七が見た海水製塩を行う塩浜は湊郊外から有安にかけて広がっていた。



現在の椎田宿(天神交差点南側)



手前が椎田宿、川向かいが湊。その間には椎田橋がかかる。



現在の湊の街並み②



① 綱敷天満宮

江戸時代、小倉藩主小笠原氏の保護を受けた綱敷天満宮には、連歌所宗匠の西山宗因が『浜宮千句』を残し、その後も連歌が盛んであった。中津街道に面する湊村の塙氏は江戸幕府の御連歌師、里村氏に入門し連歌を愛好し、綱敷天満宮の句会に参加している。



築城郡絵図(部分拡大)

幕末から明治初頭の築城郡絵図には、中津街道「椎田村」「湊村」が詳しく描かれている。椎田村の中心部には御茶屋(公儀宿泊施設)や高札場が描かれ、湊村右上の建物で囲まれた場所は湊郡屋(現椎田小)と思われる。湊村にはほかに御蔵所(築城郡の年貢米倉庫)や船が描かれる。



築城郡湊村戸別図(明治12年1月改)個人蔵

この絵図は明治初年に書かれた屋敷ごとの所有者を書いた戸別図を明治12年に書き改めたもので、左図の築城郡絵図に見られる御蔵所が郷蔵(村の貯穀倉庫)に、湊郡屋跡が小学校になっている。また椎田村と湊村の間を流れる真如寺川には太鼓橋風の椎田橋が描かれている。

② 中津街道 湊村の街並み

椎田湊は中世以降、今井津(行橋市今井)や八屋浦(豊前市八屋)とともに瀬戸内海・周防灘を介した物流や交易の重要港湾であった。江戸時代になると、中津街道が整備され、椎田村に隣接する湊村は陸上と海上の交通の要衝地としてさらに発展した。明治維新後は商業、金融、物流の中心地として栄え、椎田村には旅館が4か所もあり、かつて街道の宿場町の名残が見られる。また、湊村には4か所の造酒屋と2か所の廻船問屋があり、うち1か所は造酒屋で製造した清酒を自前の船で関西方面へ運搬していた。(『筑紫紀行』に見る中津街道…3~4頁)



湊村の造酒屋の酒樽と徳利

「濱の壽」は湊村の下ン浜屋(東浜屋)の清酒。下ン浜屋は木造帆船「長栄丸」を所有し関西方面に清酒を出荷した。



明治29~31年頃の湊村の塙家

入口の看板には「〇〇販売所」と書かれる。塙家は、幕末に塩屋彦六の名で酒販店を営んでいたと思われる。

中津街道と伊能忠敬

伊能忠敬(1745-1818)は全国を16年間かけてくまなく測量し、初めて正確な日本地図を完成させた。

伊能測量隊は文化6年(1809)12月27日に九州小倉に上陸し、小倉城下から大里、田ノ浦を経て、その後、中津街道を南下しながら測量を行い、翌年1月20日、湊の村屋又左衛門の家に宿泊した。その夜は晴天に恵まれ、地図精度を向上させるための天体観測を行っている。

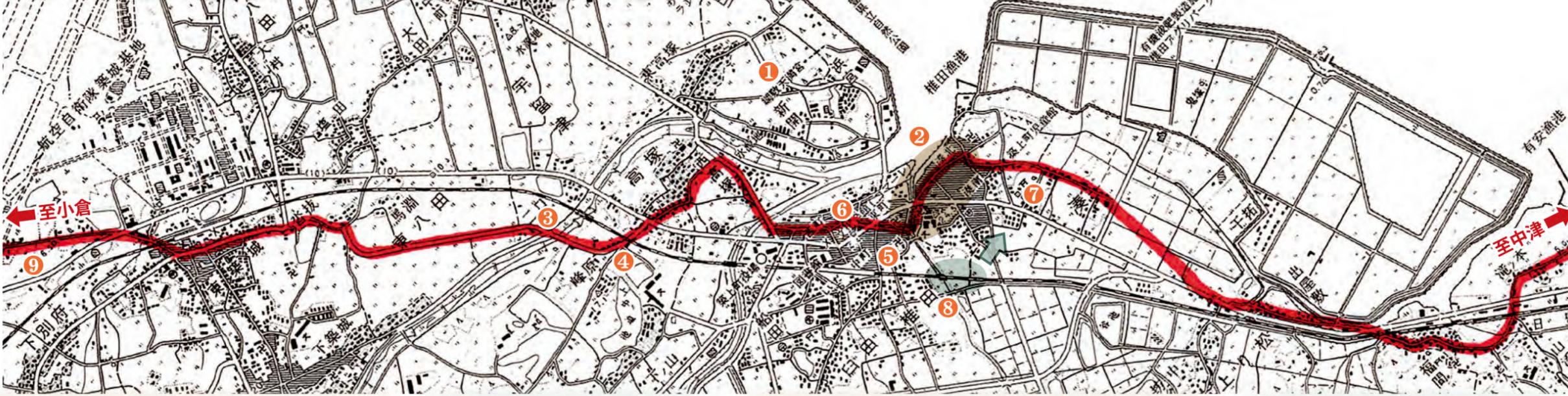
この後、東九州をさらに南下し宮崎、鹿児島を経て熊本から再び大分入りし、文化8年(1811)1月12日、椎田村大庄屋椎田常四郎の家に宿泊している。(『測量日記』より)



⑨ 西八田の水準点

測量により標高を示したもので、明治23年に中津街道沿いに設置された。

伊能忠敬も歩いた中津街道



道標・里程標

行先や距離を示した標石。町内には中津街道沿いに4か所、それ以外に2か所現存する。(詳細は2頁)

⑥ 椎田郡屋(現 延塚記念館)

築城郡の役所は当時栄えた椎田宿の中心地に置かれた。天保7年(1836)、築城郡筋奉行の延塚卯右衛門は飢饉で困窮した農民の根付料(種粉や田植えの貸付金)の返済を独断で免除し、農民を救済し、その責任を取ってここで切腹した。元治元年(1864)の記録によると椎田郡屋はその後、湊郡屋(現在の椎田小学校付近)に移転していることがわかる。



椎田郡屋の跡地にあった延塚記念館。(昭和56年に建替え)大棟に載る文久4年銘三階菱文瓦は湊郡屋で使用されたものか?



椎田郡屋の山門で西福寺に移築された。(現存しない。)

⑤ 紫雲山西福寺

江戸時代、小倉藩の切支丹禁制の宗旨改めの「踏み絵」を築城郡ではここで年1回行っており、別名「判行寺(踏絵寺)」と称された。門前の里程標は中津街道沿い「中津屋」前にあったものを国道の整備に伴い移築した。



⑦ 金富神社

創祀の頃は矢幡と呼ばれ、次いで湊八幡、絹富八幡、金富八幡と変わり、現在は金富神社と呼ばれている。この池には幕末に椎田宿の豪商日田屋重三郎が造らせ、後に移築された句碑や手水鉢があり、句碑には「布る池や蛙とびこむ水の音」という松尾芭蕉の俳句が刻まれる。(7頁)



狛犬は大正7年に日田屋が寄進



願主井上(日田屋)重三郎とある

⑧ 文豪「森鷗外」も見た中津街道

鉄道は小倉行橋間が明治28年(1895)、行橋柳ヶ浦間が明治30年(1897)に開通した。鷗外はこの付近の車窓から矢印方向に中津街道沿いの松林や鬼塚を目にしたことだろう。(詳細は5頁)



松並木は中津街道の名残(昭和30年代)